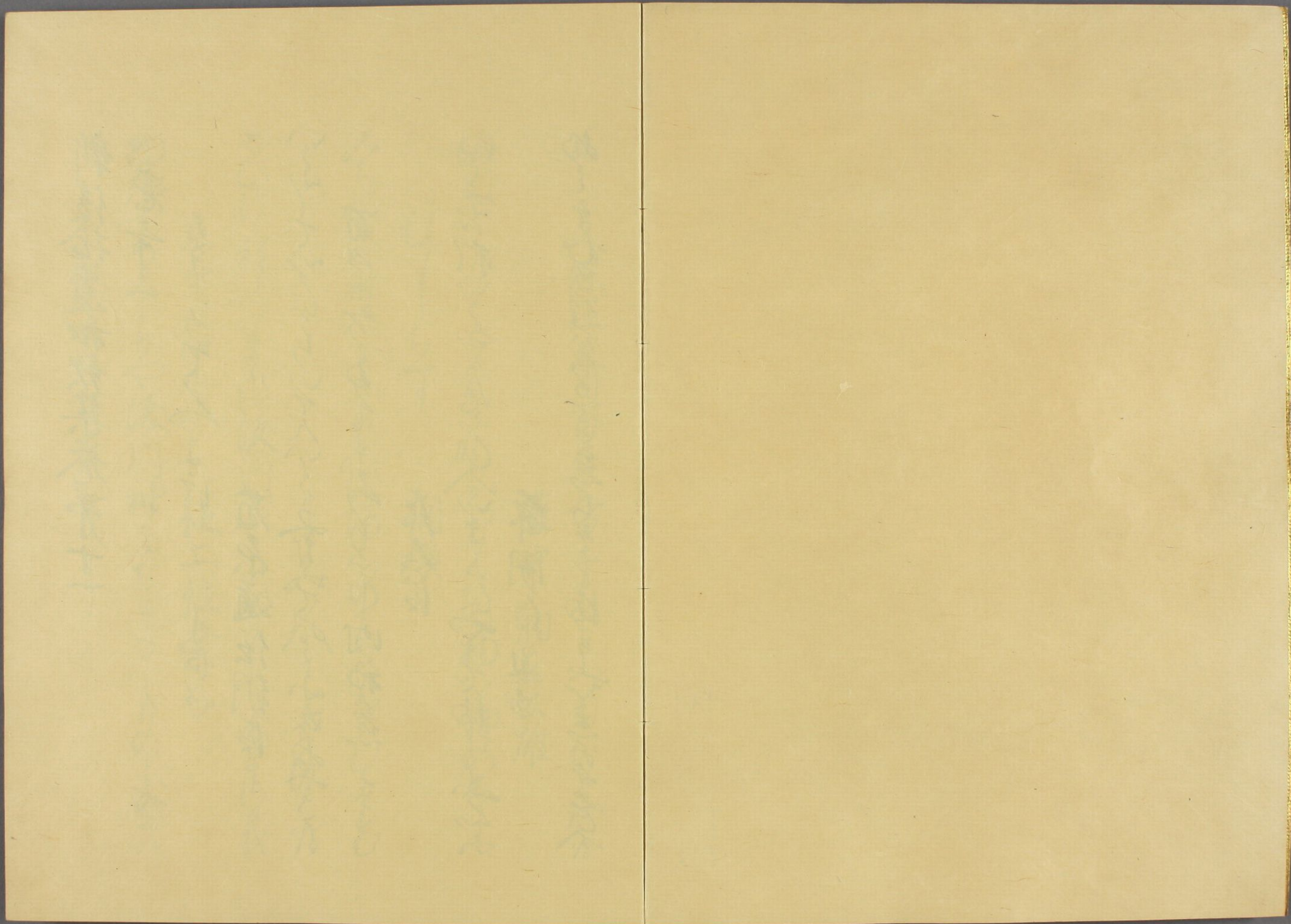


新後拾遺和歌集下







新後拾遺和歌集卷第十一

惠三十一

〜〜〜

右京道任親臣

ふあてふはらうのそんいふてはらふあふあふ
百さふあふてまうり〜時神意

たふ臣

ゆ未程いふらんといひいふまふひやそ海ふらふ

前周白出勝

ゆ〜〜〜

又保二年百さふあふてまうりげふ

權中細云云雄

海川いふせ〜〜〜
相換

みらぬの神ろ〜〜〜

よみ人〜〜〜

ふひけ程〜〜〜

惠三十一 後二位業子

物さふあふらや海川神〜〜〜

又保三年百首奇り

前大納言為定

女は傳ぬりしやまほし海川人の所みしふありきり
百も方もてつりし河思念

権中納言為重

源河神の中なる見おれいせと長と知人(は)
むしらす 入道二弟親王等

お僧正家縁

ふもも惟ふとらん初れおもさるお出ぬとれんを
折ぬたぬ大臣

正二位通友女

ふれふおとつふおをた庭よつとつ心おのふ
うさしう草生のみかり下はの結とてお物とて

源義久二女

ふらつらつら海は海をせん枕なりそい惟うとる言
唯因法師

源直氏

ふらつらつら海は海をせん枕なりそい惟うとる言

波河をくぐりてはるかにしるしむるはるかにしるしむるはるかにしるしむる

友原彩意

いふせんけいあはれ被の志くみはけりてまこととらふ海

為冬親に

神事としてゆかりのふかふか月をいそぐぬ波なり

養治四年の文に寄る月意

前大納言資季

あまの川光をみすゆく月をわくも人よきや海

志方乃中におかへんと

天曆御意

月彩は月をわくまはきくふらのらとけりてみく

権中納言為重

あまそくうらひあはれきみ月のよひ被うらみる

よもいふとく

いふはるの月をわくふかきつらりわくはるかに

貞和二年の百の文に

前大納言為定

通ちのあはれよきそく思ひはくまことのわくみえけ

むらさ

藤原春隆

いそぐあはれよみらるるそくあはれそくあはれそくあはれ

百々なるあてまつりし河忠直

汝守は親王

みね川をよみて出せみらの世思ふ原よ落おまら

女よつらうしけり 若原惟成

うらむ世の下業よと病とらとめり子国書

むしらす 深慈氏朝臣

我意ふしむとむら言はふえしんよとせつら

為道朝臣

雲らりあるといへもたのまはせ光よとむらとひあね

洞院持政家百々なるり

藤原門院少将

人よまぬ海のまといひはみをとるよとむらとひあね

むしらす よしん人不知

人よまぬおひとらよのまふと身とけししは松有れ

建保二子内裡百々なるり

前中細玄定家

こころのあはれ玉のりひてゆらそれ松よ落おまら

むしらす 惟宗光吉朝臣

あつらふ命とあふもねはらとあつらふ心とあ

泰後教長

くあふまけまぬらり意いおわんげあぬとみれ

寄焔意 兼入納云為定

あえとら焔らりう富古村のあぬひも身は

信慶法師

あふまけしふそい誓のこりかろ焔下いこまそ

深守法親王

夕焔はとらまき下りえおあんとろい程やこん

友尔為量部下

わいふあひくもいんろ焔せあそほろいよあ

檀中納云珍重

とまふそほろやあんあつまろあろ浦北焔あぬ

百首のあけ中い思意

太上天皇

りんきりはとらうこいもきりとりい焔とわん

建保二の内裏百首

後二位家澄

けいふまのいふあぬ音水のいあひんいしあま

むーらす 三善長康

よそいらる玉とふみえそせく神のあつんあろい

貞和二の百首

前大納言為定

りまふに神の海よりせりやと白玉のあはれ
永徳元年五月廿日内裏より之を
〜せり〜何思不言也

たふは

意にのめあも〜岩に深て海い〜
女よたりや〜いあり〜
つら〜
右邊中将朝光
〜
返〜

い〜の福〜み〜
貞和二年一月〜

前中納言為明

〜
建長二之八月十五夜鳥羽殿より合〜
お大納言為家

〜
基運法師
祝部 為家

人々をいふにいふ海小嶋の燈はりふれむ
里にうつしそとそいそとこしとたけ何れ
かふふむじあるとふんよつらけり

後三位の位

わらふとけりてとよあまふさかりの燈はり
返一 一見人一らす

見らるるの燈のこころは雲ふさの神の浦よと
弘安百さうよ 前大納言為兼
あまのうけり玉の下のとねとせむと浪風をか
百さうあてころり一時

尾瀬の香資康

あつらきふかこそ深川よあつらとす
深守は親王 海人

いふてそいあらはほみそとやし神の月
むらす 深義種

かひともみぬの浦の燈はりてとねとせむと浪風をか
道長法師

いふとけりの燈はりあつらとす
寶篋院贈たを
つあををいふ神とくらそぬたふ海と今いふ

百々方よりまづりし河原迄

前開白 とき

朽そんぼよらみけみきんころり神よあまら海を

むしらす 権律師 義實

身ふりまらひや程とてしほ神よけみま

勝部師 總

りよらふさしけりやけみきんぼよあまら神の海を

延文百々方より寄 権迄

寶蓮院 坊主 大住

身ふりまらひの程つゆよらまらふさしけり

むしらす 善源法師

いふせん若の思ひけり程あまら神よあまら

元可法師

いふせん若の思ひけり程あまら神よあまら

源善法師

逢ふいふあまらとてしほ神よあまら

正三位 道友女

逢ふいふあまらとてしほ神よあまら

内裏あまらとてしほ神よあまら

中つりまらよ寄 玉迄

た清門書親雅

を夜みのねよあさうや神のふらおらそよあさ清乃
百々山ありよ 上上天宮 白雲

なまよらのふおこそ有成めあささあさ慈れあ
むーらす ぶーん 志ー次

ろお川あると波のいふまにうらしてはあふ慈れん
権律師 桓瑜

あーねとすうの海はゆーとろよもるは神あえ
小槻慈治

達しは程い思ふまにさうう恨しそよあさ
後鳥羽院下野

あふれ中に 後鳥羽院下野
りみ川あささうて福舟のまじりあふんこえん

道因法師
窈上川のちりもやーぬふ舟は逢せるとる程をたさ

よみんーらす
漸とるよあえはげらるあらとつとせお物海鏡

弘安百々山ありよ 二品法親王を助
ぬうさいよあささあわ乱若れらあさあさ

延文百々山ありよとつりきう小宮橋慈
折政た政大臣

わね子産ほのくはるまの程下に乱て意とる
字の身意と 卒真は
浦風乃びく志からふゆへ舟はあのみ河さく方これ
文保百首奇し

前入細云経緯

いふ事い我身あつにいと細のと浦よれこひ
建保二年内裏百首奇し

お中細云之家

あつさういそ浦の浦よひく細のめふけさう
何れぬ者れ

新後拾遺和歌集卷第十二

恋文二

恋一らす くらみ人一らす

里く其日ふまふけり方新むよりそ恋

三つ糸

枯風よそふとれも花すさむのふふもみえぬ君

百そ方そそりり一時そ恋

たふ長

侍もまこみぬ中の吹風ぬありつらとゆたのせ

恋一らす 聖武天皇御歌

恋乃そめれ恋深もそいまこらとらり色こむむ

人そむとこりてそ所うまうりそ次

根恋乃らとそそを始けり

後醍醐院御歌

山よ恋とこひあふむの暮ふと人と恋つれ

恋一らす くらみ人一らす

うそゆふとそ人そ暮ふそつはそを初る海

法印善公歌

打倦てそりゆとらむとそ竹の暮ふとみそふ人

祝部行直

従わさぬみくしつひあさひねよ今も思ひ着たま

平次氏

自のまゝおまを由りおまをそまひそりつるよ

素性法師

意は心乱れ給わす事のおうさなちとらふこと

意の清き中

後二条院御家

いと程歎くもあめり逢とて人あさ床のあはれを

也又二の百さうりやけりよ字格意

等持院増たれた

独りいふおゆねの床あさひあらしもやとくかよふ

むしーらす 後二位業子

よしくふりさうらふあさひおわかれのあはれ

式部の久明親王

我意は心おひねのあはれやみるよとて逢ふ

吾お法師

いふよやうさひ給ふらりかよふたらしおまのあ

前僧正弘賢

小車おらるるよさひを程わす事のおをそとく

也文二年百さうりよ小寺の藤意

等持院贈たふ臣

米とらふひつはふみえてはねたふを初親といふ

通書迄と

入道贈一品親王^元因

いふいしうたうやめあきさるをたやうあひひ

延文二の百そつめされし時考為志

后光厳院御歌

ふふまうはらうふがきれきまをわろなをかん

郎一らすよま一人一ら次

水鳥くさくさむかしきよれい我も海ふらふの

は平實^實等

つとまくとも秋ひとく海川とむきを漸いくな

延文百首方よ寄しり志

前大御公^定

志おそもいふしほしきもつと志方のまきひか

郎一らすよ階宗歌

くのつとむしや海の中す獲りし付いそとてい

志戸ふぬらふ一人よ物いひめてか

日つらけり大裁之位

志るいめやまなれあめりゆまそあそいしてあ

延文二の百そつめされし時考為志

等持院増たる旨

それふらのに信雲いり神道ぬくはかりと
殿上乃んて一ふれあよ事りて物いひける
ふよあふりたれいりそさうりてはあ
てつりきり 前大納言云任

あそに神のまうの始の月えり物まをり

部一らす 源頼言

あふふぬお故のころ雲とさそくふ

真覚法師

ふふや開るまふふのころつあふふたふ

あふりいりいり

大中臣能宣の旨

ふふとさそくみえぬ程りかふゆせ下細のせ

部一らす 平光俊

ふ中れ雲ふふのころあふふまあふ

等持院増たる旨家ふくくふそ

ふみゆけふ 宗真法師

開ちあらわすこの趣路いゆさあ中といふあ

建保三年の由書百と奇に

後二位家澄

をうぬ故世の里に雲もく本情乃筆に云そとて

寄一閑意

源急氏朝臣

こえあふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

むしらす

右共清徳基氏

けしきあふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

秀晴法師

いふそくふしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

前中細玄季雄

あふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

弘安百三十二年 あふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

をうぬ故世の里に雲もく本情乃筆に云そとて

むしらす

袖遠村

あふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

蓮生法師

あふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

杉何法師

あふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

右尔基氏

あふくしむをむしき故の山志をけしき雲海あり

中務宗子親王御首そとて

平政村朝臣

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに
先後の片もまじりてゆるげり百首奇に

信實朝下

いけり身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

朝下

信實朝下

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

道勝法師

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

雅成親王

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

源棟義

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

初元百首奇よ不達意

氏部朝下

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

朝下

友原範永朝下

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

藤原元真

善く身にあはれと云ひをきよと今命は之のいふに

平守時朝臣

いふせんきよくひさしきふかきとふまゝに命をせ

源重宣御下

命をせしむる人のいふまゝに命をせしむるに

祝部成光

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

源頼康

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

百々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

津守國量

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

前右大臣

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

後山平あたる

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

いふまゝに命をせしむるに命をせしむるに

二品法親王寛助

しほふたはあふみのなはる月とくてもいふふ余あは

むふ知 有原長春

恋院ぬふゆみん三梅の心格ふ門さふ人ほ

百首寄しそまうりし時新恋

前田白土周

しほふたはあふみのなはる月とくてもいふふ余あは

あしらす 春上天皇

初うし年あはれししよきぬあはれふしほ

みあはれ日つひよつひて女のりいつ

しほり 中納言定頼

らちやう社のあふたのむかひもきぬあはれあは

百首寄しそまうりし時新恋

権中納言為重

あふたはあふみのなはる月とくてもいふふ余あは

ねがしそまうりし時新恋

前田大后

しほふたはあふみのなはる月とくてもいふふ余あは

あしらす 有原清春

初うし年あはれししよきぬあはれふしほ

みあはれ日つひよつひて女のりいつ

しほり 中納言定頼

前開白大圖

仍く不娶りせむをいれあはむとたのむる

題不知

伴周清

いふ又女のこゝやみじゆをかつしよぬ中れ慕

権津師一寛家

さるたに様そはのめゆよひあまふさ娶りあは

源和氏

そのまにうそあのみじゆをゆよのゆをいれあ

こゝにひられをいれりしりしすあふと

いひをせゆげとせ

和泉武部

いふまにうそあのみじゆをゆよのゆをいれあ

百にうそあをいれりしりしすあふと

権中納言為重

仍のあまなら申ゆれ我のこゝにのこらん

元亨二年七月飛山殿七百首うらよ

為冬朝臣

いふまにうそあのみじゆをゆよのゆをいれあ

むしらす

は眼能賢

おとまぬふらの下細い志あそ契と何姑や春

実書恋しらふゆと

素還法師

仍のれとけいけい玉つさし引せとせうとみつが
むらす

前僧正業海

契とゆとまていさうのくと又たのむとれをさ

法中淨弁

ゆまるとゆとむまての命とて契とまてとてとれ

檀律師澄寛

ゆまて命ととりてけしとゆまてと契のとてん

文永七年九月内裏にそとるよ

前入納公為世

ゆまてゆとゆと契とゆまてゆまてゆまてゆまて
郁芳門院根合よ恋のらととらとらと

ゆまゆま

六條右大臣

ゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆま
たのめゆま

新垣拾遺和歌集末巻第十三

恋年十二

約恋の心くもくゆけり

寶篋院贈たたは

傳よふやぬをよふよりまらよはきそをぬきそそふ

恋安六の二月十八日三つ三つ梅せり

つゝ小契約恋とふよふとよふせゆけり

後光嚴院御歌

仰のあせとふぬ身はふしてはらやとくゆめをいん

貞和二年百三つ三つあそりゆけり

後思屋前雲白たたは

ゆくとそとふい定ぬり言ふとさりたすをゆけり

弘安百三つ三つ 前大細云為恋

はるまたとふいふたのめたひまうたり言ふ

貞和二年百三つ三つあそりゆけり

花園院御歌

あめしとふいふとふたの目くらとふあつきそりわめ

恋安六の二月二十三つ三つせり

約恋と お内大臣實

契よむたのむとそあそ中いゆとまゆりあそ

意方れ中に 源頼春朝臣

仍のあまきとすすまそよのこひむねよのたけらふ
又保三の百とす方そそまうりけり

氏部 なる者

仍軍のうられ契そらんよたのむらふそそなり
むしーらす 後二位業子

うらふ身ふあまあはし仍たのむやまらふらん
久江冬時

仍よあまあまらふ中へふ契ぬ言やたのぬらん
は平下覚んぬ

仍たのむらふうらふあまを契ぬ言あまをらん

源和義朝臣

仍とあひかりも契やうら言とのぬれなりらん
平英時

はのたれとあふやうららん今まもあまら言なり
後二位長嗣

ふのこもあまらふらふとあまはあまらふらふ
順徳院の巻

鳥のけの鳴りもあまらふらふらふらふらふらふ
後一位宣子

いふ甘んといふあはれあめのみこいこいお琴のひれ村の
也文百々方めらまこしついで小寺の蜘蛛

後光嚴院浄家

いふ蜘蛛のあまのいひのりまるともみえぬ程は
権大納言為遠

ねそらふ心はしくぬはまりたのこころは
源氏頼

こころは約はさゆとく袖そよりまらぬま
惟宗行冬

文ねもさういふはふさういふのしめ
其

権大納言為遠家あまこころは
みゆげらふゆゑと

祝部 成光

ゆらまを程まに連のゆよあまぬらされんせきり
宗伸法師

ゆの教ふ中へ契そとだのこころぬりま書ら
津守圓夏

独れの新まよとつそゆはほと道ぬ書思た
曉勝法師

こころは書まのねと約あま身はあまこころは
覚

藤原俊成朝臣

約人のぬれおれよとて書いたの書はつりつり

津守四貴

ふつとあふさうり達とみ着つておと約あり

前大納言俊定

約つとさふくかりしは二月にぬれおれよとて

大炊御門右大臣

とておれぬ書はつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

監令婦

人よ約つとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

後三位朝臣

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

おとさふくかりしはつとぬれおれよとて

逢来の程なりやわ我神や恒事道は海なりらん
初逢意のこゝは平津舟

そのつゝあふれくさるる成海や意のひまを知ん
也文二の百さうちもさう時空の用意

前用白返書

多らよゆふららとほはよこえけり物とあはれ
又保三年百さうすに

あ大納言為定

意あふいなるはあふて名を限も余さうり
むらす 内大臣

逢来のこゝい知れど我あふとこいさなきらん
心中二の百さうちもさうすに

前大納言師賢

そのまにやそ命を絶あふけふ身ようちをせたり
逢意のこゝは 能登法師

なつての身ふらるる名をたれらん
百さうちの申は逢意のこゝ

は平津舟

と新くはそあつちも枕よ今い海のこらす
むらす 也長御書

着落よりゆいそめぬと倦つふとつわりのいとを察
る冬御下

思出の書まは月乃付よ又いつもそのとくこみそ
急別意といふとよめ

権中納言為重

えそやと信有とらる別らといそめぬはさしとていそ
永徳元年六月十二日二十日そつうせられ

一時情別意 たふ長

新とよめていそ別の中いぬのめあまを何契うん
百とつうあてつうり 一時別意

藤原為平御下

わらふらめとそや別らふらじしとの契りそえ
貞和二年百とつうあてつうりけいふ

等持院贈たふ長

鳥乃孫が老とていそ新とよめいそとていそ
むしーらす 源詮信

後野宮お内之長

うらふとていそ別らつとていそあえむ命あはれ
永徳四年八月十五夜とつうあてつうり

はつくり月前別意と

其上天皇

しんじのあひまをさるる言別神のありの月
百々方あそつり一時別意

檀中御云資教

らふまのあひまをさるる言別神のありの月
はつくりと 深頼元

しんじのあひまをさるる言別神のありの月
月前別意のこころと

前大納言為氏

しんじのあひまをさるる言別神のありの月

意方れ中に 深基時朝臣

今よりわたりさるる言別神のありの月
建保二の内裏より百々方あそつりけふ

西之位知家

曉の別あつりさるる言別神のありの月
意方れ中に 前中納言基成

志ぬらり人別あつりさるる言別神のありの月
百々方あそつり 崇賢門院

我のわたりさるる言別神のありの月

祝部成豊

乃其の疾と消あらぬく乃別やなれば別あはし
子五百番一合

後鳥羽院文内

あつあつにけりまぬ物とくればその不れをたのめが
くさあまあわく進給けしとくあり
てねしとあすの交と交してなまのま
と目のほくは女八の交よあをせ給てあ
と
祝部元良親王
けともくうあくあくあまのいよくさるん

百首文の中ふ返朔念

光の筆ち入道前務政左衛

くうまよと物とあまもさたのま想うせはたのまよひ
年比つこたかりし女よからしてあひそあ
よけつうれおれりあめめつたかある

よみ人しらす

はくしりあうんあつたてのあつたおあしあふ
返給あつとつとせ給けり

二條院御教

独れあつとあまのあつた妹とあつた本のみあ

新後拾遺和歌集卷第十

急命

洞院抄改家百三十一

西園寺入道おと改名

くろく道とむえんをれくろくはくくろく

むしらす よもく

よのきこく後おこつしりおたのめは

元亨二年三月五日後醍醐院より

せしげり時契急

為冬朔日

仍とらう程もつふんたのひふ

契急急 前大納言為定

契りともあのみお物と

貞和二年百三十一

後勅修る前内大臣

逢まてとうふ命と

むしらす よもく

くろく道とむえんをれくろくはくくろく

寄風急 津守國助

あのみかよふゆあのみ

とわりのけしき 前大納言公任

を遊の筆はわじふとくむつらきなりとく色かき
むしらす 後二位藏子

今こむと堅い浪をりこえそくさゆめ未だまら山
愛念 津守國助

こえぬ也末のねとと念つぬふのそとひ人乃あは浪
百さうのあてまうり一時後念

逢ふとをいふもれまのつとくきし中とてそそつ
念ふよ 定形法師

こそいふ約束りらぬ材多れあつらりと物もあは
念不逢念 本宰相武重家

みりのつとよかりむく驚たかふとけし海あは
むしらす 本印宗秀

けしき色のねりりこみそわき名取はつとそそ
子丸百番奇合り

巨秋つ佐丹坂

けしきふとえそそゆふおゆの雲あまやちらぬ
題不記 権大納言宗實

立ゆりこゆふ物とさひさやゆり中あまさうり雲

寄開意とらつる事

源頼光御下

かふとも人志とてやよひまよしの雲はさうりらん
百さうのふてうりし時遇不舎意

竹垣為教

雲をばらぬ程と約りり今いつらの中れら

たのしみと 前大納言為教

今やとまらの池のみなりさうらよとてぬい

むしらす 秀胤法師

六つ回くもいれまゝいほえしうりおらふすこは

有原行詮

とつやとまらぬ程のこを枕りけのほのさへい

三善頼秀

面ふとまらぬ程のさあふこみありれ

貞治百さうのふてうりし時寄格意

昔部之澄親

ゆりよまらぬ程のさあふこみありれ

たのしみと 有原長秀

こいよとまらぬ程のさあふこみありれ

寄水意とらつる事

平貞秀

此の後の終の末のやそ終の終の終

貞和二の百の終

中納言の終

いふ可く終の終の終の終の終

終の終の終

中納言の終の終の終の終の終

終の終の終

このやの終の終の終の終の終

権中納言の終の終の終の終の終

終の終の終 津守國量

我中の終の終の終の終の終

終の終の終 宗祐法師

よそのの終の終の終の終の終

よそのの終の終の終

この終の終の終の終の終

終の終の終

この終の終の終の終の終

権中納言の終

思出の終の終の終の終の終

前大御云宗明

ひさしとりの契れ付もみえぬ聖中候うそを
あ大御を為家

うさし山乃三あさしとゆえその好れと
延文百々方よ寄枕意

寶篋院贈たる旨

おあれ枕よ心渡ふつらうなれりおあれん
たあしなむけう百々方よ寄衣意

入道二お親王の道

清平の延書れとやれ衣柄ぬまやゆとあしと
まうん

寄忠意とよあり

た昔清徳と基氏

朽ろろ人の心後芽生に朽すつ虫乃ねとけられ
むしらす

宗貫法師

白菊のうらひうらう契ゆおまそやとまもあはれ
大御云通具

しとむ程をやうさの下系れけりおよこひ
延文百々寄に寄風意

寶篋院贈たる旨

吹風よ峯とえそけうと書れいふゆめ契あらん

部一らす

安部門院の舎

しよのれはゆゑをてかおまのゆはへそ今からひりこ
貞和二年の百首をうらめてうらりけふ

後鳥羽前宮白たを臣

遠山よりふまをせおまのゆしゆとやうれしん

永徳元年六月十二日内裏より三十首

うらうせうけけふ遠物恋と云ひや

左宰相権帥仲光

つおふそをらつとそわうのあうけうらうとれ契かげし

逢不遇恋

祝部新親

昔ととこひふらまぬ付ふ物も世はまきゆり

あひ一らす

権律師實茂

面もあつとこもさうひをぬかへ一のあは契あは

文保百首奇なり

中納言大寺宗母

なみのつとこひ出せしとまぬおまの母よあまも

恋ふらとて

大中后行廣の女

今いここひあえねと月日は満つ中とゆえ

思絶恋と

後二条院御家

さう一とそめあひひらひとあふとこらあわら

都一らす

今出河院遊湯

あせは何もふらんをの付りしあせを

源氏隆朝臣

あせりあせ月うくのこころを海よりそみるあせ

伴周清

うらら海をそ神の月よりそみるあせ

百首方あせりりりり時逢不遇恋

前関白たか臣

今又あせのあせ付もつりりりりり月をあせ

あせりり

源頼遠

あせりりあせのあせをあせりりりりりあせの月

源親長朝臣

あせりりあせのあせをあせりりりりりあせの月

後二条院御覧

あせりりあせのあせをあせりりりりりあせの月

あせりりあせのあせをあせりりりりり

正二位隆教

あせりりあせのあせをあせりりりりりあせの月

あせりり

西園寺入道前太政大臣

あせりりあせのあせをあせりりりりりあせの月

二十三年三月廿七日 寄 後志

大濤門 猪俣康

面影の如くともおぼしき 後志の海より やはら

び 一 らす 是 下 守 通

はらりと飛ぶともおぼしき 後志の海より やはら

前 大 納 公 為 氏

今 日 後 志 面 影 如 く 一 日 後 志 海 上

也 文 百 三 十 一 号 後 志

折 込 本 政 大 臣

る 日 後 志 面 影 如 く 一 日 後 志 海 上

び 一 らす よ も 人 為 氏

月 日 の 如 く 一 日 後 志 海 上

面 影 如 く 一 日 後 志 海 上

前 大 納 公 為 氏

今 日 後 志 面 影 如 く 一 日 後 志 海 上

一 日 後 志

新後拾遺和歌集卷第十五

憲奇十五

郎一らす

素性法師

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

有原光俊朝臣

ふりていさむもよきほり余そののほろ

夢のまはらわしにたそはさるそく

はらいてあえあんとしつとふとふと

まじらふ

馬内侍

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

はらいていさむもよきほり余そののほろ

よみ人

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

志山方中に
その上天皇

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

万秋の院

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

郎一らす
源朝臣

ふみ河志のこころを蝶のしほりよとては

寄書意

接収を収めし

ひふふとて抄の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
お元百の字より云々

は下定む

ふみそとて抄の字は其のまゝに抄りおろしとて書きたり
百の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
其のまゝに抄りおろしとて書きたり

その上云々

ふと今抄の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
おのひとて男の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
そのまゝに抄りおろしとて書きたり

よみ人云々

ふと今抄の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
おのひとて男の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
そのまゝに抄りおろしとて書きたり

源義将朝臣

ふと今抄の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
おのひとて男の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
そのまゝに抄りおろしとて書きたり

尾形門番貞康

ふと今抄の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
おのひとて男の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
そのまゝに抄りおろしとて書きたり

入道二小親王寛文

ふと今抄の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
おのひとて男の字をそのまゝに抄りおろしとて書きたり
そのまゝに抄りおろしとて書きたり

孝草恋と

伏見院御歌

夕らうらの輝るくさうらねとけりて露そとちり

前中納言直房

ささくれあひささのほろろねとけりて秋風そ

郎一らす

源頼實

契なほと露とくさうらのささくれとけりて

平貞秀

くさりたえきつねとくさうらねとけりて何恨ん

弘安元年百首一首に

後西園寺入道おとどをに

夕らうらささくれとくさうらねとけりて

恋一首よ

権大納言教嗣

とれらうらささくれとくさうらねとけりて

祝部成宗

秋風のあまらうらささくれとくさうらねとけりて

字の弟根意

後二位忠意

ゆくとる露の情もさうらねとけりて

郎一らす

春紙理宣

夕と秋の末望れあまらうらねとけりて

示宣上人

よの葉は枯はほらまよふと来うしむる程のあはれ

昔部之昔總

巻の心置れ程のまろくは我ふふそれ浦風を

絶恨意

何は脚

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

部一らす

紀後長

よの葉はほらまよふと来うしむる程のあはれ

貞和百々方ふ 前中納言為明

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

部一らす

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

部一らす

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

友原長秀

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

権中納言為重

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

子五百番方合ふ 八歳つ有家

あまはし里の程はしとほくまろの何なるん

百首方合ふてまつりし時恨意

前開白たなは

そそふ身とらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

意方れ中に 津守國久

とらにとらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

貞和二年百首

入道徳一ふ親王を因

身とらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

意方れ中に 恨意

氏部とらる友

けしとらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

意方れ中に 亭子院御家

けしとらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

貞和二年百首

花園院御家

けしとらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

百首

前大納言音成

けしとらに物とらにうそあそ恨の作ありけり

恨意

如法之寶院入道お因存

月のうさぎと歌くも程やまゆり人々を懐ひつゝなるん
んとしていふことと成る事せしむ

伏見院御歌

つゝとてんごうみじ〜らりれりさふう海あ
かそ〜らう

新後拾遺和歌集卷第十六

雑言上

部一らす

後醍醐院御歌

八雲あつたもやふと書つめて昔よりとみはじり

百首方めされ〜けつ〜ふ述懐

右上天皇

病もわろたぬと葉の玉ふれむろふや世はねよ

あ〜らす 田舎院御歌

先山と雲のふれ〜あ〜そ〜け〜あ〜ふ〜ら〜あ〜

天倉座まふぬ〜あ〜ら〜ら〜く〜ゆ〜り〜

入道親王乃尊

久遠の御代にあらざらんあつりなき三月日ありて
むすむす

後二位太子

りくは海母のそみよの山松たはしよこをさ
は平増運

いふせんとうあつたの松たはしよこをさ
津守國夏

うらたつたときみえぬ梢むひつるあつたの松たはしよこをさ
は平俊憲

八十まであつたよこをさ
は平俊憲

こゝろあり

津守國夏

あつたの松たはしよこをさ
津守國夏

浦らうり打たえんあつたの松たはしよこをさ
津守國夏

あつたの松たはしよこをさ
津守國夏

後二位太子

秋期芳に破の浪かゆくあつたの松たはしよこをさ
永仁六年十月龜山院住持吉祐より書

河遠臨眺望しとふるりとけりし中りけり

津守國冬

物ヲふれいそおし作をれ浦よりをの河ら臨眺

冥治百首より海眺望

吟泉前を改る旨

このうらやみちりちみそをいれう書いつて白紙

百首中より中しに

そし天の里

夕志のむしとまをいれ書いつて白紙

百首中より中しに

たふに

わさの浦のねよめえせ風のまに都打とあるあつ

権中納言為重

おさの浪よりむしとまをいれ書いつて白紙

破波とまをいれ書いつて白紙

あつ風の河破けておさの波程をせうらなをいれ書

冥治百首より破巖

後之位為進

垣せよあつ後浪のつくりてまをいれ書いつて白紙

源義基

ふみておれもえいほくとし松と海のほとけ
貞和二年百三十一

寺持院跡たる石

とりのえきあやとくとも浮橋のあやきこたて
むしーらす 僧正定伴

昔あつた昔の材年とくくあつたむと海か
柚遠村

ひくかえれ橋より得のくさむと松や海
よもいーらす

歌ふくあつ岩橋ととも世ともあつたむと海か
松

あえ百三十一方あてまうりー時橋

津守園冬

海と女もえりて浮田河のくさむと松や海
難分れ中い 源彩と下

お前のゆふ村もわいそくらんまゝ雲もえりぬと海
延文百三十一 暁鶴

寶徳院跡たる石

ひくかえれもえりて浮田河のくさむと松や海
あつーらす 西園寺前内大臣

ねえよとらすうねとくく鳴とあひますともあつた
松

延文百首より。 権大納言時光

今も猶ついでいそく嘯と忘るやもれおとす人
拵政を政大臣

鳥のゆよいそく行きてもこのあ今のいそく嘯

雑巾方の中に 光嚴院御製

いそくいそくのいそく知りし花の香の雲をいそく

百いそくいそくいそくいそくいそくいそく

入道二親王の道

長い秋の光れねえいそくいそくいそくいそくいそく

嘯と文種といふこと

内大臣

実ある時をいそくの秋をいそくいそくいそくいそく

野いそくいそくいそくいそくいそくいそく

光身の内えれはや嘯のいそくいそくいそくいそく

前大僧正頼仲

秋いそくいそくいそくいそくいそくいそく

源頼春の作

秋いそくいそくいそくいそくいそくいそく

左京業平朝臣

いそくいそくいそくいそくいそくいそく

入道二品親王より中世始り一五十を中

前中納言定家

人父かえぬが位の位心なすまそくお色のかりのり

述懐方とて

お大納言為定

位心あつふまうすう身あま天の甲一坂そさすのり

平政村朝臣

のりかこ程のかりぬ位心なれりとうへんをゆう

弘安百そさうあてりりし時

前大納言為氏

そゆこの言は理本へのまことなるあつふりくを

都一らす

平常朝臣

朽跡るるに書えよ理本の花咲かそとくお身

前春後教有

うらまをりけのまことつりまそくえゆはる中

為道朝臣

世中からまき物さうさおあはほくもそくはひも

貳子^{時子}内親王

信系はらふら母はらそふありともこの身は

まうしれりしと書きしと

信實朝臣

神あすふりあつるのうき草うゑの海よひさそあひ
むしーらす 一品法親王寛平

り草山とくまど給ふや八十とこゆわわ治
述懐方中に 源義将朝臣

今あすふりのやうる海合のりさあ
よき人ーらす

見ふけつ玉とまふとわわ海のりさあ
そふさならもゆら松えいふとあふわわ海

後鳥羽院河和方あささくあ
よき人ーらす

鴨長明

きつあふさあ海あひささくあ
むしーらす よき人あふ

ゆきとる浪あひささくあ海さうりやわわ海
百ささめされー次よ

順徳院御歌

むしあふさあ海あひささくあ
そふさならす 後二位家澄

ゆきとる浪あひささくあ海さうりやわわ海
前大納言為家

今も世も人も推らる身は七年此老を此

文保百の年よ 前権僧正雲雅

同人のあそびも世にひらりと伝へて

部一らす 冬玄法師

相あつちらひと見ても推しぬのねと

津守量夏

世とて心いれと実あつ心はたふさ

法下慶運

のこころはゆるりたる者もいふ

弘長元年百の年よ 河内家

常盤井入道前太政大臣

わらわはそれゆゑのねふとよと

おあつちと 法眼因忠

松風と友とあつちと山ひら

元可法師

心置はゆるりたる世にひら

部一らす よし合つち

山あつち若下なる分てけ

紹弁上人

それとていふもあつちと

正三位通友女

のうらやうにほのぼのたるも又わくまぬへく松風を吹
く家風と
折政と政と臣

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も
百もふよむねのふよむねの風も

源義将約片

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も
むよむねの風も

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も

祝部成景量

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も

友原普信

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も
ふよむねの風も

惟宗貞俊約片

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も
控中納言實教

ふよむねの風もふよむねのふよむねの風も
源頼之朝臣

はひと又はふつと里と程さくもつと申すを
権大僧部 經賢

まじりてはまじりては里にいふと申すを
祝部 成詮

まじりてはまじりては里にいふと申すを
源頼康

まじりてはまじりては里にいふと申すを
権大僧部 澄縁

まじりてはまじりては里にいふと申すを
友原康行

まじりてはまじりては里にいふと申すを
蓮道法師

まじりてはまじりては里にいふと申すを
源頼朝

まじりてはまじりては里にいふと申すを
前大僧正 行基

まじりてはまじりては里にいふと申すを
友原頼朝

まじりてはまじりては里にいふと申すを
友原頼朝

坂原の捕物

この里行の首領の末子にして新めの山は凡本流り
前大僧正慈勝くくはよませけり子

方よ田家

法印下慶運

そり外門の頼むるの事より此よりいねる

弘安百三十九

静仁法親王

頼むるのりおるやいりつねの杖乃ちつね

述懐のりつね

寛政法親王

世中よりいねるをいひていふとゆとけり

前大納言實教

いふに頼むるたは此のこゝとゆとけり

雅命

宗鏡法師

思出らんふいふのをき物そつとそり

権中納言雅定女

このおのりいふと思つた身おるこゝとゆとけり

お檀僧正因伴

老て頼むるをきつたといふに終末のこゝとゆとけり

坂原の事

世の中今もいふにいふに老せぬとの思ふ

昌義法師

くさふくたふれ光の故何とまらふよこえをひん
法中系巻

あまそとふらよ光の身たふらに世と知ぬ
性敬法師

うらふ身は昔とて思ふと速らん世の世に知す
平重基巻

かゝり老ぬ身よ今とていふはたのむと知す
よみ人しらす

うらふしらふの復の思ふよとていふは世に
源孝行

うらふふらふを命とていふは世とて老ぬ
善好法師

ほの世と知ぬ身を忘るは身たふらよの神おま
あえ百とて方よ述懐

権中納言云雄

世中たふらふとていふは深の神よとていふ
あふのころん

新法拾遺和歌集卷第十七

雜方下

世とのまじく横川よこみ約きうはら

友原之光

見よせぬ松もえらう心置いふわははすし深の社

むしらす

よしん不知

しと深の社よ深世とのまじくもくらのさかからしほ

述懐方よ

如阿法師

年のお今ひわらむとさひしんくつらう雲深の社

中務之宗尊親王

いよても故といふよとふらう粒世よ妙まことありけれ

貞和二年丁酉三月廿一日

後思屋入道お雲白た倉

我心のうらひしこふ身よ友と志くそ月やまじん

心中二ひ百首方めされけり次下り

醍醐院御歌

そのつらふられまもと何はらやふてせ梅のれ月

山持僧よゆりて二回よゆりつるものとさひわ

てふめり

前大僧正道基

新法に昔のよひれはあかまきほうみは雲はの月

むしらす

後二位為理

淳和二年八月十五日

八月十五日

けつ時

抄改を改る臣

今身は

あいらす

あいらす

源光行

老身は

幼子内親王

うら

建保

大納言通具

新清

むしらす

は

我より

貞和

前大納言

秋の月

あいらす

夢

世と持てはるるなりあね物なり月よらむとてさへ

源頼貞

とみよひね我身ともふ秋の月つらねる時家

閑居月と

中園入道前々後人

ふらさ月よ今よりをを袖てそむく人の心とて

むしーらす

前中納言定宗

くつらふらふら母よふらてうらふらもさへおれ

津守國冬

くつらふらふら母よふらてうらふらもさへおれ

平直基

ふらふら母のあはしとてなりとそり浮河よら持らぬ

中惟法師

ふらふら母のあはしとてなりとそり浮河よら持らぬ

友原為重景下

持やらぬらなり身おらさどあ母のそらひふ悦ん

文保百とてうよ 前大納言實教

らふたると来たたのむを坊よつとあはし月の前

むしーらす

権僧正良憲

あのみとて身よらねと来たのけしはふらとて

法平昌善

けしつてあつらひしる老られ身のけしほり来とほま

法平宗信

おほしなる母あつちかめを身れり来とけやなまん

友尔高純

しほりおほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

前権僧正宗助

さうたつとあつちかめを身れり来とけやなまん

三善為連

おほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

よしつら次

さうたつとあつちかめを身れり来とけやなまん

法眼聖義

おほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

弘安元年百三十三歳あつちかめを身れり来とけやなまん

前大納言為母

おほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

法平有雅

おほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

妙藤法師

おほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

昭覺法師

いふにわいしあて申すはけふはけふのあまふ
宗覺法師

あひ鏡のうら河のけしほよしくあひ持しあふ
維新とて 芳名念國師

あての母と持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
源氏直

うら河のけしほよしくあひ持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
檀小僧都 實家

つるよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
つるよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ

あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ

あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ

あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ

あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ

あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ
あふよらと持しあふあふのうら河のけしほよしくあひ持しあふ

我身もさきく物とほく人の上もさひげられ
前大納言為家

室女はまゝいふとりのそむく世よりと情れ

よみ人——ら次

しをそい竹のそぶ乃未かめ身はうきゆかき

あえ百そそを——ふ述懐

お中納言雅孝

ねあめ身とふふ世とあつたともつて程つて

永徳二子鎌田の宣命よ拵政乃るり

あせしれゆ——ふ忠仁とく——めてこい宣を

——ゆり——りねあ——年六十三うそゆ

——とい出——拵政乃政大臣

い——の政よあめ身とふ先のねとるうら

百そそを——めて——り——何述懐

権中納言為家

あつたは政と七政と——程身ふこゆわが

正治百そそをよ——二条院續成

今いそはよゆきそらの程あら出——り補成

延文二の百そそを——り——何

等持院續成大臣

わらわあふらうし浦を吹く一りりり色浪のなりき

貞和百三十九めされけり次よ

光嚴陀河象

十とせあまら世とたはくさなふりて民ととまほ
道人法師やまひふまうひて約きりり
泰山前君まうらふこころ一やせてる刀が
をくりけりりけりふよみそつて約きり

た共東塔直義

世のあふ我といのまの浪あつ命ありまもなり
をとのまじりありゆるとありりりり

いさくりけり 西行法師

世中とそしきそねといとん思知とんになく
世一らす 定歌法師

りのあはらうの持てとらじとそひまうら世と詠つ

権大僧部 歌深

ふのあはらうの思出のりき昔とと又思ふふ

権僧正果守

いふ今定てあふそあつられみりりさの昔鏡の

西園寺前内大臣

せめて今いひあはらうとあはらうは竹むらさき

源光秀

ゆゑふひつらと昔よくかへし河乃世の付

法捕約片

うらふし今いふ事い行ふ身とくのみまにいひお

栢重吉

うらむと母のいふことくわいのことぬ復身と

源光正

のうらむわいのしほとたのまをほせとひひのい

三善資連

をうらむ身いお母乃世中に持ぬ物く倦つそ

僧正永縁

我あそ物あふくと世中にいふをきりとみろを想ひ

権少傍部運四

うらむと母とわそくわい昔終よぬそくわ

光嚴院御衣

身い付らぬあひ世まじくくわいおそを

前僧正号玄

おとらぬうらむ物くをれゆらわくよれあよゆえ

法眼宗海

よふくいふあはむとくわいそくわい昔成人

前大僧正桓惠

さひねのそぢあふらぬ来乃我のほほいさふとてしよ

幼子内親王家宰相

神おほ首れ着のうらあさと今ふはあす程思ふん

弘安百三十九年よ 前大納言為氏

うらとみるふらひれあふらそ着なとそあふとふひのあ

六条拾段のさひよ約きうふよあう

前大納言忠良

着あふらとみるふらひのやそゆさうと世といふん

むらうす 貫つとく

まらりほほくとあふらひてい知ととぬも燃あふら

あふらうらなとふらと思あふら

後京拾段前左大臣

鳥いおあふらんれ燃うらとえゆと来ふひと白雲

ふらうらうらひて雲林院よゆらとあふら

なとすうらうらひとあふらとつらうらけ

良暹法

この世といふ雲の林よとて燃あふらんうらとあふら

西園寺れ然とあふら

山階入道あたる臣

山様みぬ世れまゝとて神のおしす花乃下
前中納言定家母乃心ひよはるまは言
は後系極極政のりこりま家々すはしそ
乃名所さくふと限乃まれりときり
中納言定家
別は牙乃夕言に書後てははれまは恨をさ
お坊をせ給おとあまよくつてふてこ
月つこりまふらねら一はまの時心
はまは
お中納言有忠
ふらまは別め知よ入ら世もつらまを
お

むらす 一卿上人

いと後心とらはれ程をもみ定めはは
高弁上人

世中と接ぬ身ありと心せつひあはし
少将内侍身ゆりて弁内侍らま
けつひ

友原光俊朝臣

返 信實朝臣

たはる色あつとらぬら心もみは年海おん
あさうたあつたあはね世とみは老の海

故二条院四方ともろねく我身世にあらん
のらわえれとも惟よいらまよあ蓋の終
何そくくあらみく

幼子内親王

今母よ我より外表とも惟少くされ終を思え
あのみら女れ身ゆらりよけいこく
りりくくくそけいりく

藤原仲文

りりくくく契くく初来れ海乃河とくあそく
むくくくく

あらしねのくみ汁れ有夜あくふきてもわが神
祖又國助り三十三回乃終のくす
として又國をく事くとおひ出く

津守國夏

そくくくくくくく親のわやと我回くく
弘安百くくくくくくく

前大納言為氏

たらし終ありていひめくくくくくく
世中くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

源順

母中と何ふあまのりく露とまきそ消わらぬの氣
むしーらす

花園たふ長家小入進

いふてふい推は^まお白のゆき花のありこも世と

権大納言長家

弟のよふまゝの露とみちまに^まほ^ま的の氣を世と

源仲繼

後芽来ま^いと^う露は^まの^りの^まと^ある^まは
又よま^まま^まく^く後前裁のれま^まと

藤原門院少将

を^まま^あそ^そ程風^まま^まの^まま^まの^まま^まの^まま^まの^まま^ま

有原伊家^う女子^こま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま

て^はま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま

周防内侍

霜枯の萩お^ら乃^の神^の露^のま^まま^まま^まま^まま^ま

前大納言^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま

約^の一^の次^のは^の懐^の舊^のと

雄辯法師

そま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま
氏部^のま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま

惟宗光吉御下

前大納言忠良

仲忍ふら玉はなうとていふはれそのこと忘る

あいらす 土御門院の教

まの花婿のりみられあふひふうとせよとあ

ふふそ掃あ

新後拾遺和歌集卷第十八

釋教寺

花叢のうら山形鏡乃と

皇太后宮女中後成

物自山とてうねの雲白く九禁れ人いさすそを

ねりしと 中務卿宗尊親王

いけふとまはらぬとて物自さるなりそを

方便亦唯一系はそ二亦そとと

入道贈一品親王

まはらぬとてまはらぬとてまはらぬとて

天教奇しとてふあり

深空上人

我々佛よりつゝあひまのつすいそお目そあさ

法苑珠林よ以是知今佛欲説法苑

後醍醐院御教

法のも今とあふえふ咲ぬとてせくやねひるん

妙音ふ

卒然法師

今よりあさ月乃光よらそ星そ勢ぞよとじて旅

秋ふひて月の入とらん

成尋法師母

あさひ出月をめぐりてらの内よとむとてさひ

寶塔ふ

法眼深義

昔の庭と玉乃砌よあさく光とまの筆月ひ

野しらす

よしん志らす

今そあつゆとのたよ雲晴てあしたのあさひの月

梵網經若因強健怒力修善らん

慶政上人

我々そこのちらくならまひは月日おねそ想らん

化城喻ふらん

前僧正頼仲

くもあつ我身よこそ成す縁とこそ思はれ
むしらす ひとり人ふ知

月と花をばあつらふらるるは世れ周く行や歎
唯徹論と 津守國夏

とこししんうを世あつら我こそとらふとて思は
あつらふ 寛永法師

みかんの心は月乃晴やとて海より波影の心はれ雲
ら程の木増不滅と

くしふむのまをわ月暮又をのまらふらふ
如阿法師

釋教方とて 夢窓圓師

雲よりとたふあよ出くみよ思はれ月よとてわあ
今利権の心と 後弟松栢政前を政を臣

わらうらんの月とわらうて物れみよとて思は
觀音量壽寺の得益分と

了そに世れは雲らふ消て音まらみぬ月とみぬ
想於西方と 示隆上人

介月の名はとてとてとてとてとてとてとてとて
花嚴經の心とてとてとてとてとてとてとてとて

花嚴經の心とてとてとてとてとてとてとてとて

檀律師 幸因

ふりかたのむ目をれ新あまのふり奉とやまの思を

百日乃入堂のあめふは教を動ちよのかり

てよみゆきる 入道二品親王号道

あひまを致とのせりく柳うしの下の若やん

むしらす 前大僧正道玄

惟よえらこころんこのはれあまふふん

新道法師

あかりあつ水よも月やうそとさふわそよむいふ

賢珠上人

あまのんかんとそれまに控わらうひとねむいそ

よみ人しらす

人あまははあれとつてとあれやねあうん

歎経釋文天加此方教遺跡施即彼國

来運 前大納言為家

舟よふ都よむしうはじとち海世の岸よゆき

囑果亦今以付属汝等れんと慈よき

よみゆけり 前大納言忠良

あまそととて浦のりか系あうてあまを

涌出ふよ少余子老

法眼深義

心通と法の深義をいふはよむとていふは下等
十戒をいふはよむとていふは

華嚴法師

法をいふはよむとていふは下等
囑累亦令一切衆生普明因縁也

入道第一親王等

かたの浮世はあまふむらりていふは下等
前入納を定入十二之にこれいふはよむと
法をいふはよむとていふは下等

權中納を為重

あまふむらりていふは下等
重何上人

いふはよむとていふは下等
涅槃經といふはよむとて

亦深義

今いふはよむとていふは下等
如月法師

法の入をいふはよむとていふは下等
此牙何足狀一聚虚空塵

花園院御製

ふも惜じしものしらそめは海にのち
ふも惜じしものしらそめは海にのち

新後拾遺和歌集卷第十九

神祇奇

弘長百三十五方を著す時神祇

後九条前内大臣

後九条前内大臣

母のあふは内平乃多程たうと神祇の山に

貞和百三十三方

等持院贈た大臣

身とあふは内平乃多程たうと神祇の山に

石清水社方合す 源家長卿下

八幡山神やさうりきん鳩乃つえ老てはるゆたはあ

百々方々一時抄改を改る也

予ら山内ゆき神のめりて子孫をきき(孝)松え
びらす 中江延朝

此に記すそのむみさふ山内ゆき神の推し
後西園寺入道おと改る也

一とらふ世とあらむれを移す或たのむみさふ枯の志あり
建曆二年十二月和方取方二十前一とらふ也

前中細玄定家

記すてらふいとわく神をみさふれらり小教のつ
文永二の二月二日よはりてきり河内伊豆乃

此よはりきり二十とらふ中に

中務卿宗尊親王

神を推したるたのめた表知つことそのとらふ
社以述懐と 信實朝臣

おの波行あらとありとみさふとけよ玉津嶋娘
新玉津嶋社を合よ神祇

前大僧正光濟

玉津嶋あむらういよのれ病あもみくもや
郡らす 荒木田直直

いそ河をた若波をまうとらう一とらふ代とけの

神を祀るを神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを

神とし、其のけりしめを重くせしむるを
神とし、其のけりしめを重くせしむるを



津守國量

檀中納言為重

津守國平

度会朝勝

新編わが事

新後拾遺和歌集卷第二十

慶賀三奇

形一らす

前入納云乃氏

とら海乃志砂おすにおまきういんさきう子せたり

お中納云運房

祚のぬりてとむしししり岩ら浪や万代のす

建保四年百三奇に

前中納之定家

吉野川いしととと千浪のとれいさそそ我君候

中殿て花契万巻と云とととせし

孝の河のませたり

後醍醐院濟義

河らいれとそれのさふさひわつぬ重い万代のす

永和元年三月廿一日松樹春久と云と

簿とれ一決よ 太上天皇

十のり乃れとまふらり松とて契るといひに万代の

形一らす 系極前開白太政大臣

君の世れいしと成ぬさい中せの松とて系たり

文保百三奇あてふりける時

は平定為

いふよりよはしめそわつ君れあまのひけさの葉とて

むしらす

権大納言具通

にこと今より母のしめやしくらゝるや君とまはりしゆ

二條院御掾

あつちのつめらやとねおん出の物見のりつとまをれし

慈安二の二月三日こそうううせしれし時

寄世祝

権大納言忠光

限の世とこそとせおふとむ月日や君の由新けりえ

慈安四年九月十三日池月深光とらふ

ふりとううせしれし時席あそまううとて

前開白述書

らとせとこひおしに限の月とともひのう着のりまの

雑方乃中に

権大納言為定

ゆてとひおそそ神祝らと程けりゆく君の御家

永徳元之六月十二日二千ううう禱せしれ時

寄道祝

たふ臣

おとまのり山代の志也と文よ今みえそらうううお徳おら

寛元二年八月廿五日乃主基方女工可

ゆきうふ君のふり日九重のた内山入いふ

らん限りらすつりうとてうと常盤丹

入道茶を政大臣のりやうらいつりて

約々のむらぶ

後深草院少将内約

九重の内野に名に記つきてもろふ子代乃たてみ系
花園院位よれとて御一考の時大行したん
りてとめてまつせ給とて所み紙よとてき
山を給けり

後伏見院御製

ゆじさふ縁をよとて異竹のろとぬ臨の代に久き
水返し

花園院御製

百歳よれもろとてそ安をらんをこれの子代乃異竹
赤元百とて方ちをけりよ松

後西園寺入道おを政右衛門

四代中そよゆりぬとて宿の松中をせれまひまこころ也

雑山方乃中に 後二条院御製

高砂れ木のへよとて松をえり色とやふとて考つてせ

亭子院乃六十賀よ京極山息取のなり

きり山屏風方 伊勢

けりりりてとてまわら松を道い長とて物と推りみえ

元久二年新古今竟家乃とて

後二位家澄

君とあがうすりゆりみと出る子代をてつとてわが浦を
文永三との續古とて竟家乃

大進中将具氏

きやう世は海内とくり也二葉のうらみあつてん
後光の考も括収おた官

つとせ漢のまゆあすくふ今もつりまやまこと
永和元年大葦舎徳紀方辰日退老音

敬ノ千々松原 儀同三司

あつての藝うとひあしりしとせと十のりふん

あつての松原

